

法然門下の諸行往生觀

後 藤 尚 孝

土の往生と見るものとあるが、はたして日常生活の規範の上に、道徳上、実践上にとの程度各派の主張が生きてくるか、そこまで考慮されるべきである。その中で西山義では、念仏一類説で諸行往生を認めないけれど、念仏に開会して還つて諸行を取り入れ、これで信後の生活態度について教義的に解決されているように思われる。

第三に浄土宗鎮西派の場合、二祖聖光の徹選択集と識知浄土論を姉妹篇と見て、両書合わせて諸行往生を見ようとする学者があるが徹選択集は諸行往生を論じたものではなく、浄土門の通仏教的意思を宣明にすることと、口称念仏の深勝性を論成したもので、識知浄土論と結びつけて論じることが疑問である。また識知浄土論は諸行往生を主張したものであるが、聖光作として扱うことに私は疑問を持つ、これらのことは拙稿仏教論叢第十六号に「聖光上人の教学的立場」と題して述べた。

第四に鎮西派の聖光、良忠共に諸行往生義として扱う学者があるが、聖光の著作ではあまり明瞭ではなく、良忠になつて西山義の念仏一類説、長西らの諸行本願説に対して、鎮西義の立場を明確に規定したもので、聖光を含めて諸行往生義として扱うことは当を得ない。この点もつと史料を細かく見て行く必要があると思う。

第五に諸行生不の問題をながめる時、諸行認容派と否認派とに大きく分けられるが、細説すれば、次の三点にそれぞれの異説を見ることが出来る。一つには念仏諸行の両往生が因願において、四十八願のうち、主として第十八・十九・二十の三願の取扱いかかわること。二つには往生の証果について報土に往生するか、辺地化土に往生するかの異説を生じた。三つには諸行認容派にあつても、一類往生か、二類往生か、更に詳しい教説が見られる。これら三点は各

一 念仏対諸行、諸行生不の問題が法然門下の主たる課題となつた。その理由としては、法然が選択本願念仏の義を根本主張とし、称名念仏の一行が本願生因の正定業となし、余善諸行を所廢の行としたのである。これに対し諸宗では諸行往生が通念であり、専修への非難がここに多く向けられたのである。行觀の觀經玄義分秘鈔第一に「同門弟^一如是異義不同有事何云法然上人云弥陀如来不^レ為^レ以^レ余行^レ往生本願^レ唯以^レ念仏^レ為^レ往生本願^レ料簡給^レ故一向專念義^レ各各皆共^レ相伝^レ而^レ淨土三部經中定散諸行往生^レ樣說問此不審持勞^レ如是異義^レ共建立^レ也。

と言つている如きは、異義異説の原因をよく示すものである。

二 この発表にては、諸行生不の問題点等について指摘し、論及したのであるが、紙面の関係上ここでは概略述べてレジメとする。

第一に諸行認容派に属する長西、鎮西において、往生の行として諸行往生を認容したものと、念仏と諸行を対等視したとか、積極的に諸行を主張したとか見る見方は、必ずしも当を得ない。特に真宗側からの見方が強いので注意しておきたいと思う。

第二に諸行往生認容派の中にあつて、諸行が念仏と同質に見て、同じく報土往生を許すものと、諸行往生否認派にあつては、念仏諸行を異質のものとして、念仏だけ報土往生を認めて、諸行は辺地化

派互に入り混じつた見解を以つて論成されている。

三 認容派の中、長西の諸行本願義は念仏のみが本願生因の行でなく、諸行も本願に誓われた行であるから、念仏諸行共に報土に生ずることができるとして、第十九来迎引接、第二十諸行往生の本願とし、その根拠は大經、觀經、般舟讚、寶積經の願文を引いて論成している。長西の念仏本願義には、念仏は勝であり、諸行は劣であつて全く念仏諸行を対等に見てはいない。

鎮西においては、諸行は非本願の行とするが、少分の地位を与えて三心具すれば報土往生が可能であると認め、またそこには九品の別があることを西宗要第二に述べている。三祖良忠に至り、広く諸行往生の問題を論じ、東宗要第三には三經一論、五部九卷の中に諸行往生を説いた文献の甚だ多いことを指摘し、決疑鈔第二には、第十九来迎、第二十を果遂の願と名づけ、諸行を非本願の行とするのであるが、撰機の願により浄土往生が可能であることを唱導している。これは当時、論議の相手として長西らの諸行本願義、西山の念仏一類説があり、激しい対論が行われたようであり、従つて諸行往生説が強く前面に表われたのである。

西山証空においては、報土往生は弘願に誓われた念仏以外にあり得ないとして、念仏一類説を唱え、本願所成の報土は一味斉同であつて品類差別なく、九品は穢土修行の人の機品の別を説いたに過ぎないとした。

以上認容派にあつては、長西の流儀が最も諸行往生を積極的に認容するものであり、西山にては安心が確立した上に、諸行を念仏の中に包容し、いわゆる生け取りにしたもので、諸行を功妙に認容されたのである。これに対し、鎮西義はその立場を規定し、また聖道

門の説をも一往認めためたもので、折中説と言えようか。

否認派にあつては、念仏と諸行は本質的に異なるもので、諸行は直接往生に關せずとする派で、隆寛、幸西、親鸞がそれである。

隆寛にあつては、本質の念仏は報土の生因となり、報土に生まれ、余善諸行は報土の因とならず辺地に生まれるとし、報土辺地の二土往生を説いた。極樂浄土宗義には報土往生の機と辺地往生の機とを説き、報土往生の機は本願往生の機であつて、さらに三種の別を説き、第十八・十九・二十の三願の機を説いている。これらはいづれも本願所成の報土へ生ずるとする。辺地往生の機は觀經に説く九品の人にして、即ち帶惑疑生のものを指すとして、大經、略論の説を根拠に説明している。そして本願名号の他力に帰せざるが故に、辺地に生ずるのであるとし、無量壽經の辺地胎生と觀經の九品往生とを同視している。親鸞にては第十八・十九・二十の三願を以て浄土三經に配当し、第十九諸行往生、第二十自力念仏往生として諸行及び自力念仏を以て辺地胎生の因としたのは、隆寛と同説であるが、隆寛は此等の行を本願の中に入れず、親鸞は第十九・二十の兩願に基くものとしたのは隆寛と相違する。この兩願の親鸞の見方は、出雲路の覚諭の見方と似ているが、親鸞は諸行の報土往生を認めず、辺地胎生の因とした所に相違を見る。

四 かくして諸行の報土往生は、經論釈に諸行の往生を説く文があり、そこから鎮西、長西らは報土往生を許し、隆寛、幸西、親鸞は善導、法然の廢立釈を根拠に、諸行の報土往生を許さなかつたのである。かように各派それぞれ法然の教説に根拠を以て論成されている場合があるから、これを正確に判断し、諸行往生の異説についても広く見渡す必要がある。